

## 化学物質過敏症患者の転地療養の効果に関する検討 ー重心動揺計を用いた病状変化把握の試みー

○中井里史<sup>1)</sup>、山村拓也<sup>1)</sup>、光崎 純<sup>1)</sup>、松井孝子<sup>2)</sup> 坂部 貢<sup>2,3)</sup>

1)横浜国立大学大学院環境情報研究院・学府 2)北里研究所病院臨床環境医学センター

3)北里大学薬学部公衆衛生学

【目的】静岡県伊豆市に、化学物質過敏症患者の転地療養のための施設「脱化学物質コミュニティ（あいあい姫之湯）」が建設され、昨年から入居が始まっている。これまでも旭川をはじめとして転地療養施設が建てられてきており、症状等の軽減が観察されるなど、転地療養の効果がある程度認められてきている。伊豆では、転地療養の効果を探るために、症状調査などの自覚症状調査に加えて客観的な指標による改善評価のために重心動揺計を用いた検査を試みている。本報では、研究の概要およびこれまで実施してきた重心動揺検査について報告していく。

【方法】伊豆での転地療養効果に関する研究の全体像に関しては下記の文献を参照されたい。健康状況に関する調査内容、スケジュールはおおよそ以下の通りである。

入居前：QEESI 調査票、フェーススケールを用いた質問紙調査

入居時：入居直後の住宅および周辺の影響に関する質問紙調査

入居中：健康調査票、フェーススケール調査を毎月、また、ほぼ2ヶ月に1度重心動揺検査を実施

なお、退居時（入居期間は一律には定まっていない）、退去後も質問紙を用いた調査を実施しており、併せて環境測定も行っている。

【結果】本施設の竣工直後（2004年6月）の室内濃度は、ホルムアルデヒドが10ppb未満、VOCはいずれも検出限界以下という極めて低い値であり、入居も7月から開始された。しかしその後、室内にカビが発生するなどいくつかの理由から入居が中断した時期もあり、現時点では順次入居が再開されている。そのため健康調査に関してはまだほとんど入居直後の調査しか終了していない（2005年4月現在）。今後、重心動揺検査結果の推移、調査票から得られた結果との関連性について検討していく予定である。

【文献】中井里史. 伊豆・脱化学物質コミュニティ 1. 紹介と研究概要. 平成16年度日本環境管理学会・室内環境学会合同研究発表会. 2004, 東京.